

東海道を デザインする!!

―旧東海道案内看板デザインの試み―

近江学研究所研究員

石川 亮



草津市野路あたりでの調査

「東海道における統一したサイン計画を提案してほしい」

という相談が天津市の都市計画課から舞い込んだ。そのオブザーバーとして草津市都市計画課もこの取り組みに参画し、成安造形大学で美術やデザインを研究する学生と一緒に取り組みたいとのこと。二〇一〇年に発足した成安造形大学地域連携推進センターは、様々な地域からの相談や依頼に対し学生や教員の研究に取り込み「見える形」で表現してきた。その内容は近江(滋賀県)の風土や歴史を理解しながら進める内容も多く、その都度、近江学研究所と共に取り組んできた。

依頼内容を整理すると、天津市と草津市は琵琶湖を挟んで対岸に位置し、隣接していることから良好な景観形成を目指す連携協定を結んでいる。これは自治体の垣根を越え景観をテーマに取組む全国でも特筆すべき取組みと言えよう。その糸口として両市を貫く一本の道、「東海道」を一つの統一したデザインで表現するサイン計画の提案が大学に依頼された。そこでこれまで景観ワークショップや地域研究のプロジェクトを経験している学生や、サイン計画におけるデザイン作成経験がある学生、対話しながら一緒にものづくりに取り組む経験を持つ学生に関わってもらい、それぞれの特徴を活かすことのできる思考プロセスとして図1に見られる①〜⑥を今回の取り組み方とした。それは短い研究(制作)期間の中で常に整理された状態で進める必要があったからである。②の天津から草津までの東海道を両市の担

当職員と一緒に歩き、身を以て体験すること、次に④の方向性を確認する上で両市の有識者や市民代表者に集っていただき、対話型のプレゼンテーションを行うこと、この二点をあらかじめ設定した。これは取組みの意識や気持ちに共有する意味で、様々な考えや人の立場を理解したアイデアを提案したいと考えたからである。

主旨理解と実地調査

天津市、草津市の景観に対するこれまでの取り組みや施作の説明を始めての研究会でレクチャーを受けた後、実地調査に取り組んだ。

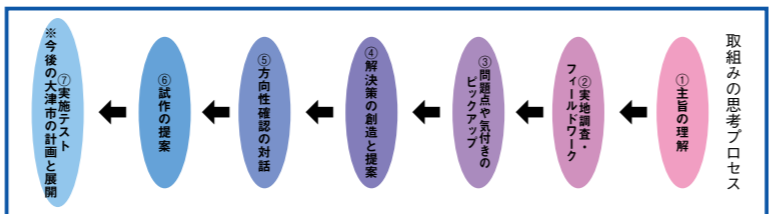


図1

京都と滋賀の境界付近、山科四宮から逢坂山を越えて大津札の辻、石場まで、石場から膳所商店街を通り石山駅へ、石山駅から唐橋を渡って建部大社の前を通り一里山を経て草津野路へ、野路から矢倉道標前を通り草津本陣前、追分道標まで、実施区間約一九八キロを四区分し、二日間を要して午前、午後の交代制ですべてを徒歩で調査した。調査にあたっては、天津市が用意した調査シートに、街道沿いに立つ案内板、観光案内、柱巻き、道標などを近景、遠景、設置場所、意匠、種類、機能、形状、備考の項目を当てはめていく形で始まった。この時点で我々が確認したもので八一カ所の表示を見つけ出した。

問題点、気づきと解決策の提案

街道沿いには随所に名所が有り、歩いて楽しいことは共通の認識であった。しかし、歩く人にとって不自由な道であることもわかった。それはトイレが少ない、案内表示が見えにくい、メンテナンス不足、道が分断されている、など多くの問題点や気づきが見えてきた。特に東海道の表記方法に両市に違いが

あることがわかった。天津市では「旧東海道」、草津市は「東海道」と表記している。これは後日の対話で有識者や地域の方々の意見より「東海道」と表記することになった。

この他、学生は様々な発見をするが、気づきや問題点が本場に重要な問題か否かは、さらに検証する必要がある。

次に解決策やデザインの考え方の方向性について以下四つの項目に分けた。

- ① 一里塚的機能
- ② 起点／基点づくり、表裏進行方向の統一／曲がり角の向き
- ③ ゲーム性
- ④ 既存案内板の有効利用

その形態において五つの案を提案した。

- ① 看板型
- ② 自立型
- ③ 柱柱巻き付け型
- ④ 地面埋込型
- ⑤ ベンチ型

さらに主要な要素として、大きさ、素材、設置数位置／仕様／特徴、文字／情報と五つの考え方を提示した上で、ファーストプレゼンテーションに挑んだ。そこでは大学側から歴史有識者、沿道の住人代表者へ参加を促し、実現可能に向け忌憚のない意見を求めた。

方向性確認の対話、試作の提案

デザイン案の主要な方向性として、東海道五十三次や近江八景で馴染みのある歌川広重の浮世絵をモチーフとしている。フォントやロゴマークもこの浮世絵版画に刻まれ表現されているものを抜き出し、デザイン化して提案することになった。これは両市が街道を擁する歴史都市であることは言うまでもな



上：瀬田唐橋前にて調査する学生たち
中：ファーストプレゼンテーションの様子
下：ファーストプレゼンテーション後のフィードバック対話

〈コラム〉インタビュー

旧東海道案内看板デザイン作成プロジェクトについて、大津市歴史博物館の樋爪修館長、草津街道交流館の八杉淳館長に、それぞれのお立場で一言ずつこの取り組みについてのご感想をいただきました。

樋爪館長

大津市からの依頼ということで、このような素晴らしい研究調査発表をいただき、ありがとうございます。大津市の立場から、厚く御礼申しあげます。

今回の調査は、芸術大学の学生さんたちが、実際に東海道を歩き、若い視線で独特の感性を持って、既存の看板や標識を調査し、その問題点をご指摘いただいた点は、本当に感謝いたします。このような資料は、大津市という行政機関にとって本当に貴重なものであり、今後、有効に使わなくてはならない財産だと思っています。

新たに提案いただいたロゴや書体のデザイン、表示板のアイデア、そしてそのコンセプトも含めて、熟考されたものであり、大変興味深くプレゼンテーションを聞かせていただきました。

これらのアイデアを、地域住民がどのように受け入れてくれるかが最も大切なことですが、それを、実現させるために我々が努力しなければならぬと強く感じました。

大津市の東海道沿いにおいては、それぞれの学区で、様々な取り組みがされていますが、広く円卓会議のようなものを開いてフラットに意見交換を繰り返し、歴史街道の意味や、観光客の受け入れ、地域活性化の取り組みなどについての意識を共有することが大事だと思います。そこに行政の力がうまく働くことが理想だと思います。

八杉館長

街道は、線として繋がっています。ですからなおのこと共通したデザインで統一する必要があります。

悲しいことですが、「他県から滋賀県に入ると急に案内表示がなくなり、どこにいいのか、何があるのかわからなくなる」とよく言われます。実際には、そんなことはなく、それぞれの地域で、案内板や表示がしっかりなされています。ただ、色や大きさ、形が統一されていないため、バラバラな感じが、わかりにくいという印象につながり、表示がないと言われてしまう結果になっていると思います。

今回の成安造形大学の提案は非常に興味深く、しっかりと練られたものだと思います。どうしても、行政単位では、その地域のみが管轄となり、他の地域には入りにくいというのが現状です。この取り組みは、大津市と草津市が協働し、東海道を串と考えると、二つの地域をつなげたという画期的な取り組みだと思います。この取り組みを指導された石川先生がおっしゃっていましたが、将来はこの串が伸びて、江戸日本橋までつながればと期待を寄せる次第です。いずれにしろ、今後の我々の大きな課題であることには違いないと思っています。これをきっかけとして、大きな夢につながっていけばと思います。ありがとうございます。



右：八杉館長
左：樋爪館長

のであろうか、使い捨て社会、大量消費がまだまだつづく今日において、メンテナンスフリーという考え方が無難な選択なのであろうか？（果たしてそういう事が問題の論点なのか？ いやそうではないはずだ）

この両市連携の景観施作は統一したデザインで歩く人を導く事が最大の意義であると考えますが、実は歩く人と迎える人が互いに向き合い、街道を通して心のコミュニケーションが生まれることが大事なのではないだろうか。責任と管理が重くのしかかり論点がズレてしまう気がしてならない。論ずるのは簡単であるが沿道の地域の方々のサイン計画に対する理解の深まりが重要であると感じている。みんな東海道の導き（サイン計画）を大切に思い、古人より

受継がれた遺産を誇りに街道を通して我々が繋がって行く事が大事なのではないだろうか？ 取り替えて容易で費用も抑えた材質を考えると、必然的にみてきた答えが以上である。

大学が湖西に位置することから、学生と大津市や草津市に出向く機会が少ないのが現状である。しかし今回のプロジェクトに取り組むことで、サイン計画、デザインを通して大津や草津の歴史に触れることができた。また現在の都市が抱える様々な問題に直面できたように思う。美術やデザインの思考で現実社会と向き合う実践の場がまだまだ潜んでいる。この経験を活かして未来社会にどのような考え方が必要であるかを学生と一緒に考えていきたい。

「プロジェクト研究参加学生」
大内清樹(メディアデザイン領域4年生/2012年度生)
寺田駿志(メディアデザイン領域4年生/2012年度生)
中村早希(美術領域4年生/2012年度生)
矢吹美帆(メディアデザイン領域4年生/2012年度生)
小林圭子(メディアデザイン領域4年生/2012年度生)

今後の考え方、意義

実地調査から現状のサインを見て経年劣化は避けられないと感じた。すべてを石材にすることができれば問題は解決するかもしれないが、コストを考えると現実的でないことはすぐにわかる。サインや案内板は設置した者が管理を行うことが自然な考え方であろう。誰のものでもない案内内は誰がメンテナンスする

図2：学生によるデザイン案



趣ある店舗や軒先など、希望された住民には自主管理を条件に設置可能なタイプ